ー科学者として成功するヒントー

(財)東京都医学総合研究所(都医学研)・所長
田中 啓二 たなか けいじ

執筆者紹介
徳島市。徳島大学医学部栄養学科卒業。
徳島大学酵素研究施設助手・助教授、
臨床研部長・副所長を経て現職。

内藤記念科学振興賞、朝日賞、上原賞、
東レ科学技術賞、武田医学賞、日本学士院賞、
徳島新聞賞科学賞、徳島大学栄誉賞などを受賞。

「・・・あゝ　おまへはなにをして来たのだと、吹き来る風が私に云ふ」。このフレーズは、30才で夭折した中原中也の詩集「山羊の歌」所収〝帰郷〟と題された詩の一節であります。ふと過去を振り返るとき、いつもこのフレーズが浮かんできます。私は医学部栄養学科を卒業して以来、今日まで(約40年間)一貫して〝タンパク質代謝〟の研究を続けてきました。還暦を過ぎ、人生の残り火が消えようとしている年齢になって「おまへはなにをして来たのだ」と問い質されると、いつも暗澹たる思いに打ちひしがれます。私の研究者人生においては、確かに〝幸運〟がありました。実際、プロテアソーム(細胞内の巨大で複雑なタンパク質分解装置)の発見は、偶然の所産とはいえ、世に出る大きなチャンスを頂きました。そしてそのパートナーであるユビキチン(分解目印)の研究者たちが、2004年にノーベル賞を受賞すると、私の研究も俄に注目されて生命科学の檜舞台に躍り出ることができました。私の研究の原点は、徳島にありました(当時の医学部附属酵素研究施設、現在の疾患酵素学研究センターにおいてプロテアソームの発見という僥倖に遭遇)。その縁もあって、昨年、徳島大学栄誉賞を戴けました。

さて私にもし世間的に喧伝されているような〝成功〟があったとすれば、その原動力は何であったでしょうか?私には学閥といった天からの恩恵に浴することは一切無く、ただ孤軍奮闘、自分のみを頼りに世界に向かって孤独な闘いを挑んできました。その結果、朝日賞や日本学士院賞など身に余る数々の褒賞を得ることができました。大袈裟なことを申し上げるつもりは全くありませんが、余り利口でない私ですら成功という名の名誉(虚像かもしれませんが・・・)を得ることができたのですから、未来に希望が約束された若い人たちは、頑張ればだれでも夢を手に入れることができるということを強調しておきたいと思います。

おこがましいですが「成功のヒント」ということを申し上げさせて頂くとすれば、それは「大きな夢を持つこと」だと思います。科学者としての夢、それは「未知を解明して世界の頂点に立つという野心」と言い換えることができます(その結果、社会の役に立つ成果に発展すれば、至上の幸福となると思われます)。しかし野心は現実のものにすることができなければ、儚い夢で終わってしまいます。夢を手に入れるための唯一の手段は、持続的に努力することに尽きると、私は思っています。これが私のいう「成功のヒント」であります。私には自慢することが一つあります。それは努力することです。努力することについては、私は誰にも負けない自負があります。東京に出て約15年、公的な不在を別にしますと、週末に個人的理由で出勤しなかったことは、数えられるほどしかありません(流石に還暦を過ぎて二日酔いに悩まされるようになり、また研究所が移転して通勤に片道1時間以上を要するようになってからは、時々週末に一日休暇を取るようになりましたが・・・)。但し、これは欧米では、全く自慢になりません。「お前馬鹿か!」と言われるのが〝落ち〟です。かつて私のこの生活態度を友人が外国で吹聴したために、学会等で欧米の畏友たちから「君は1日20時間、研究しているんだって?」と揶揄され、一時「Ｃｒａｚｙ Ｋｅ－－－」との綽名までもらいました。これって貶されているとも思えませんが、決して手放しで誉められている訳ではありません。時間対効果が能力評価の基準になる欧米では、無為に努力を重ねることに大義は無く、仕事に長時間かけることは何ら自慢の種にならないのです。しかし、私は知っています。輝かしい科学的業績を挙げている(少なくとも私が知っているノーベル賞級の)俊英たちは、人知れず熱い心を抱いて無限に努力していることを。私は「私の成功の秘訣が、夢の実現に向けて努力を惜しまなかったこと」にあったことを信じて疑っていません。本音を言えば、愚者である私の場合、ハーバード大学やケンブリッジ大学出身の賢者たちを敵に回して打ち勝つためには、人一倍の努力以外に他に取るべき手段が無かったというのが、正直な感想です。若い皆さん、大きな夢の実現に向けて持続的に努力することが成功を導くための至高の戦術です。一寸した頭の良さ程度では、世界には通用しません。そのためにも人生をかける(世界で一番を目指すという)大きな夢を持って下さい。抱いた夢が小さい場合には、世界との競合を凌いで勝ちを得ることができても、それは一時の満足にしか過ぎず、最終的に勝利を収めることはでき難いでしょう。繰り返しますが、大きな夢とそれを手に入れるための渾身の努力こそが成功するための無上の戦略です。この精神で若い人たちには、頑張ってもらいたいと期待しています。

株式会社クラレ 新事業開発本部 くらしき研究センター 合成研究所
森原 靖 もりはら やすし

現在の私：

みなさま「ミラバケッソ」というキーワードでスタートするCMをご覧になったことがございますでしょうか?「ミラバケッソ」とは、「未来に化ける新素材」の略称です。このキャッチフレーズには、「やがてくる世の中と、そこに生きる人のためにきっといい未来に化ける新素材をつくってみせる」という約束と、「そのために私たち一人ひとりも化けていこう」という自分へのかけ声の意味が込められています。このような企業理念と自分の意志が重なりあって、私は現在、高分子材料メーカーである株式会社クラレの研究員として、研究開発に携わっております。

現在の職務は、従来の高分子に独自の技術を応用し、新たな機能性を付与した新材料を創出する探索活動です。具体的には、ターゲットとする事業領域の文献や特許調査を詳細に行い、独自技術適用の可能性を検証するための企画実験を繰り返します。こうして得られた新材料の特徴を明確化し、クラレの新しい事業として提案するという、非常にやりがいのある仕事です。国内外の大学や研究機関との共同研究を行うことも多く、昨年は山形大学に一年間駐在しておりました。

学生時代の私：

徳島大学在学中の私は特に優秀な学生ではありませんでしたが、部活もバイトも勉強も寝る間を惜しんでとにかく貪欲に取り組みました。無限には続かない学生生活の中で、できるだけたくさんの経験を積むことが大切だと考えていたからです。

なかなか将来像が定まらなかった自分に、現在の道が開かれたのは、研究室に配属され、増田 精造教授をはじめ研究室のメンバーと出会ってからでした。研究を通じて新しい発見の面白さと現象を証明する難しさを実感し、学会や論文発表を通じて大学から海外へと世界が広がりました。不思議なもので、「世の中に役立つ新材料をつくりたい」と目標が具体化してくると、勉強は目標達成のための手段となり、苦にならなくなっていきました。3年間の研究生活はあっという間に過ぎ去り、自分の可能性をもっと広げたいという思いで奈良先端大の博士課程に進学し、博士号を取得することができました。自分よりも親の方が驚いていたのをよく覚えています。大学院大学のため、いろんな大学から人が集まりとても刺激的な環境でしたが、徳島大で学んだことはいつも自分の助けになりました。

後輩の皆様へ：

徳島大での経験が如何にすばらしいものであったかは、私の残りの人生を使って証明したいと考えています。これから大学で勉強をはじめる方も、社会に巣立つ方もいらっしゃるかと思いますが、どうか日々の生活に悔いの残らぬよう、大切に過ごして下さい。皆様とどこかで一緒に仕事ができる日を楽しみにしております。

プロフィール：

1978年6月	岡山県倉敷市生まれ
2001年3月	徳島大学工学部化学応用工学科 卒業
2003年3月	徳島大学大学院工学研究科化学応用工学専攻 修士課程修了
2006年3月	奈良先端科学技術大学院大学 物質創成科学研究科 博士課程修了 工学博士取得
2006年4月	株式会社クラレ 入社